

『沈みゆく大国アメリカ <逃げ切れ!日本の医療>』

堤 未果 著 集英社新書 740円(本体)

日本の医療制度を再認識

会員 佐藤 光子 (52期)



1 高額なアメリカの医療費

「あなたは盲腸手術に200万円払えますか?」という、本書の帯に書かれたキャッチコピーに、「アメリカでは、本当にそんなにかかるの?」と以前の私なら思ったかもしれない。しかし、3年間の留学後の今なら、この問いの意味が実感としてよくわかる。アメリカでは、歯科治療はちょっとした治療でも1回に1万円程度はかかり、虫歯の根幹治療になると歯1本で10万円以上はかかるのがざらである。また、留学中、やむなく救急車をよんだことがあるが、なんと、後日、救急車使用料の9万円の請求が来て驚いたことがある。これは加入していた民間保険でカバーしてもらった。しかし、民間の保険に入っていれば大丈夫かという、保険の種類によって、保険を使用できる病院とそうでない病院があり、また、一度立て替えて支払いが必要なのか、病院から直接保険会社に請求してくれるのかも異なるため、あらかじめ保険会社への確認が必要だったりして、病気で体調の悪い時に煩雑である。おちおち病気も出来ないという気がするが、そうはいっても病気にはなってしまうし、そうすれば背に腹は代えられない。

2 本書の内容

本書を読むと、アメリカの医療制度が、どのような状況になっているのか、社会保障としての保険制度が無く、医療制度が市場原理のなかに組み込まれると、どのような状況になるのが良く判る。また、保険証があれば、どこの病院でも原則1~3割負担で診てもらえるという日本の国民皆保険制度がいかに国民の生活を

守るものであるか、生活に安心をもたらすものかを再認識させられた。日本には、高額療養費制度もあるため、アメリカのような医療費が自己破産理由の上位を占めるということも考えにくい。勿論アメリカ人も民間の保険には入っているが、月々の保険料は高いのに治療範囲は狭く、自己負担率が高いという。オバマケアについても、日本の国民皆保険制度とは全く違う制度で、民間保険への強制加入に過ぎず、実際は掛け金が高い割には保険適用の範囲が限られており、還元率が低い。そのため、医師がオバマケアの患者を診たがらないなど問題が出てきているようである。

このような日本とアメリカの違いは、憲法25条の生存権に基づき、医療制度を社会保障として行うのか、民間の商品としての保険に依存するのかどうかという根本的な違いであるという指摘に、今更ながらハッとさせられた。この日本の医療制度も様々な外圧にさらされているという。

本書では、その他、混合診療や薬価などの問題や、地域での医療モデルなどにも触れており、全国長寿ナンバーワンと最低ランクの医療費という2つを見事に成功させている長野県の例も詳しく触れられている。

3 最後に

本書には「かしこい患者が医療を救う」ともある。高齢化社会の進む中、私たちがどのような医療制度、介護制度を望むのか、まずは自分たちのシステムを再認識し立ち止まって考えるのに、様々な視点を与えてくれるという点で本書はお薦めの一冊である。